

表現と実践から介入へ

—ハッキングとポランニーおよびジジェクと 20 世紀哲学史の収斂—

From Expression and Practice to Intervening

— Hacking, Polányi, Žižek and Convergence of 20th-century Philosophy —

大 藪 敏 宏

OYABU Toshihiro

I.ハッキングの科学史・科学哲学における「介入」主義的な科学的实在論と社会的構成論を、分析哲学の M. ダメットの真理論を媒介にして、パリ・フロイト派の流れを汲む S. ジジェクの精神分析と遡及的構成論と対比する。その結果として、20 世紀における分析哲学と科学哲学との席捲は、ダメットとハッキングにおいて、ヘーゲル哲学をフロイト理論に組み込もうとした J. ラカンと S. ジジェクの考察と収斂する様相を呈するに至ったことが明らかとなる。このことは「真理」観の大きな変貌を意味する。

キーワード： ループ効果、構成主義、J.デューイ、M.ポランニー、I.ハッキング

1. はじめに—介入主義的科学的实在論と「ヘーゲルの伝統」—

心的外傷(トラウマ)の概念を生みだした心理学史をめぐる科学史・科学哲学の成果を整理するときにおいても¹、真理論をめぐる命題と実在との一致対応をもって命題を真理とみなすという対応説(correspondence theory)の終焉を宣言する H.パトナムに至る現代の科学哲学の潮流においてもまた、偶然性をめぐる「ヘーゲルの伝統」が浮上した。こうした研究とともに、さらにイアン・ハッキングの言う「ルーピング・イフェクト」の科学哲学とともに、伝統的な「現象の救済」という概念に替わって「現象の創造(creation of phenomena)」という科学哲学の新たな概念—この概念はもちろん対応説の終焉宣言の論理的帰結でもある—も現代では生まれている。こうして客観との対応によって真理が保証されるというような真理の対応説はさておいて、世界の過程に人間が「介入(intervening)」することによって現象を創造するのであり、そこに实在性が成立するというハッキングの介入主義的科学的实在論が登場した²。

本稿では、こうした科学哲学の成果を行為論や自我同一性(アイデンティティ)のダイナミズムと道徳生活の社会構成的实在論との関わりをマイケル・ポランニーの哲学との連関の中で明らか

にする。さらにパリ・フロイト派の流れを汲むスラヴォイ・ジジエクや現代分析哲学のマイケル・ダメットの動向とともに、私たちの自我と道德生活がどのような危機の中で新たな実在性を開拓していくのかについて取り上げる。その中で私たちがいつの間にか不可逆的に「新しい人間になる」道德的社会的心理的ダイナミズムについて、考察したい。

2. 自我と道德生活の構成的実在論—ハッキングとポランニー—

自然科学的領域における介入主義的科学的実在論に対して、ハッキングによれば人間社会においては「ルーピング効果」を通じて人間が変革されることになる。精神科医によってある方法で分類された人々は、自分たちが分類された通りに変化してゆく傾向にあり、また彼らのその変化に応じて、分類と記述は絶えず改訂されなければならない。こうした多重人格をめぐるルーピング・イフェクト(1990年代のハッキングの概念)は、実験は反復されるのではなくて特定の現象が規則的に引き出されるようになるまで実験装置とともに絶えず改良されるという介入主義的な科学的実在論(1980年代のハッキングの立場)の論理構造と酷似している。つまり、1990年代のルーピング・イフェクト論は1980年代の介入主義的な科学的実在論の延長線上にあり、その発展型である³。

またさらに、こうしたハッキング哲学の論理構造は、やはり同じ新科学哲学の潮流にある、暗黙知と言葉の関係をめぐるマイケル・ポランニーの議論の論理構造とも同型でもある。—「言葉の意味は、このように、言葉を手探りで捜す行為の中で変化し続ける。そしてそのときこの変化に焦点を合わせてこの変化を自覚するということはない。そして私たちのこのような手探りが、明示することのできない含意(コノテーション)の蓄積を授けるのである。言語というものは、言葉によって伝えられるべき新しい概念上の決定をする過程の中で人間が言葉を手探りで捜すということの所産である」⁴—。このコノテーションの蓄積を積み上げる手探りの領域を、ポランニーの有名になった用語で、暗黙知の次元と言語化したのである。その場合、ハッキングと同様にポランニーにおいても、介入的な意思決定行為から離れて、現象の認識が客観的に成立するわけではない。そしてさらに、こうした分類と記述と実験枠組みとが絶えず改訂されるというプロセスを通じて、一方では世界が、そして他方では人間が変革され「新しい人間になる」というところも、両者に通底している。—「私たちのイデオムつまり慣用語法を変更するということは、これから私たちが自分の経験を解釈するとき用いるであろう準拠枠を変更することである。それは、私たち自身を変更することである。…(中略)…私たちの知的アイデンティティの変更を始めるのは、それによって実在との接触がより近くなるという希望にもとづいてである。私たちが飛び降りるのは、もっと堅固な足場を得るためである。…(中略)…これが、私がデノテーションつまり明示することはアートつまり技芸であると言ったことの意味である。……実際のところ、概念上のことであれ知覚上のことであれ欲望上のことであれ、予期の枠組みを変更することは、不可逆的な発見的行為なのであり、それは私たちの理解や知覚や感覚を本当で正しいものにもっと近づくようにチューニングしようと希望しながら、私たちの考え方や見方や評価の仕方を変換することである」⁵—。ルーピング・イフェクトによって、アイデンティティは変容(異化)し、人間と社会は新しい人間と社会へと刷新(更新～異化)されていくことになる⁶。背景にクーンのパ

ラダイム・チェンジ論的な歴史哲学があることは容易に理解できる。

だからハッキングが「多重人格」概念に焦点を絞りながら「新しい人間」の社会的構成について語る時、ポランニーやローティらとともに、後期ウィトゲンシュタイン哲学とクーン哲学以後を生きる新科学哲学の成果と境位の中でしか理解できない新たな科学哲学の水準を念頭におかなければならない。—「過去を記述し直すとき、我々はみな、新しい人間になる。いわゆる<幼児虐待の社会的構成概念>という話題が、ごく一部の人の関心しか引き寄せないだろうということは承知している。しかし、私は、そのように構成された知識が、ループ(環)となって人々の道徳生活にもどってきて、自分の価値に対する感覚を変え、魂を再構成して再評価する経緯という問題を、常に念頭に置くつもりである」⁷—。

1980年代には日本特有と云われた「いじめ」現象が、今日では世界各国に共通の普遍的現象と云われるようになってきている。つまり「幼児虐待」が「社会的構成概念」であるように、「いじめ」もまた「社会的構成概念」として歴史的に構成され、「そのように構成された知識が、ループ(環)となって人々の道徳生活にもどって」くることになり、それが私たちの魂を再構成し、それがさらに道徳生活とアイデンティティの新たな地平をもたらすと同時に新たな魂の傷(トラウマ)を呼び起こすだろう。このような歴史の中の「道徳生活」の変容を「念頭に置く」ことを忘れるとき、「いじめ」現象をめぐるルーピング・イフェクトは新たな堂々巡りをもたらし、神経症は回帰し続ける。それがフロイトの精神分析理論の示唆であり、そこに分析者が「介入」することによって、その症候の永劫回帰に癒しをもたらそうとするのが精神分析療法の目標となった。

森羅万象の体系的理解をめざしたヘーゲル哲学の後の19世紀に分化した自然科学と人文科学と社会科学とはその後の約1世紀の離散的分立的繁栄を経て⁸、20世紀末には新しい科学哲学がもたらした構成的実在論とともに再び収斂し始めたかのようにであった。それを「ヘーゲル的」と形容するかどうかは、もはや重要と思われない。

3. プラグマティック・ターンと「介入」主義的実在論

ところで、ここでハッキングが1990年代になって<幼児虐待という社会的構成概念>の問題に取り組むようになった哲学史的背景は、後期ウィトゲンシュタインやトーマス・クーンらの言語哲学や科学哲学だけではない。そこには、もう一つの偉大な先駆的伝統であるプラグマティズム哲学の伝統がある。「デューイは真理は保証された受容可能性であるという考えをわれわれに与えた。彼は言語をわれわれの目的にかなうように経験をかたどるため、われわれが用いる道具として考えた。それゆえ世界及びそのわれわれの表現はデューイの手にかかってほとんど社会的構成物になったように見える。…(中略)…実在論は言葉や志向の中での表現の問題であるよりも、より以上に世界の中での介入の問題である、という私自身の見解は確かに多くをデューイに負っている」⁹。このデューイからハッキングの「介入」主義的実在論へと受け継がれた言語のプラグマティック・ターンは、ローティだけでなく¹⁰、先ほど引用したポランニーの言語観にも受け継がれているのであり、こうした幾つかの知的伝統の協働が現代の新科学哲学と呼ばれる新しい哲学の潮流の背景となっていると思われる。

そしてハッキングは実証主義からプラグマティズムを峻別しながら、「プラグマティズムはす

すべての確信を知識のプロセスの中に位置づけるヘーゲル主義的教義の一つである」と整理している¹¹。ここでハッキングが、ラッセルとホワイトヘッドや初期ウィトゲンシュタイン受容から論理実証主義へと受け継がれたヘーゲル批判とともにある 20 世紀の実証主義の潮流に対して明確に一線を描きながら新大陸のプラグマティズムの中にある見失われがちな伝統を復興しようとしているときには、それらの 20 世紀の実証主義とは異なって、パースを含めたプラグマティズムをポスト・カント的でヘーゲル主義的な知的伝統の中にあるものとして位置づけるのである。ここでハッキングからの引用を確認する。—「ハンガリーでヘーゲル的かつマルクス主義的伝統の教育を受けていたので、ラカトシュは対応説のポスト・カント的、ヘーゲル的解体を当然のことと看做していた。彼はそれゆえパースに似ていたが、後者もまたヘーゲルの土壌の中で育ち、他のプラグマティストと同じく、ウィリアム・ジェームズが真理の模写説と呼んだものを相手にしなかった。20 世紀の初頭にイギリスで、そして次いでアメリカで、哲学者達はヘーゲルを攻撃し、真理の対応説と指示による意味の説明を生き返らせた。これはいまなお英語圏の哲学の中心的話題なのである。この点ではヒラリー・パトナムが教訓的である。『理性、真理、歴史』の中で彼は対応説に引導を渡す自分自身の試みを行っている。パトナムは自分自身を全くラディカルと看做しており、『われわれがここに見るのは、2000 年以上にわたって永らえた理論の逝去である』(七四頁)。ラカトシュとパースはその一族の死は約 200 年前に起こったと考えていた。とはいうものの二人ともく西洋の科学の客観的価値の説明を望んだ。そこで真理の代用となるものを見出そうとした。ヘーゲル的伝統の中で、それは過程の中に、知識の成長それ自体の本質の中にある、と彼らは言った」¹²—。ラカトシュとともにハッキングもまた、真理の「対応説のポスト・カント的、ヘーゲル的解体を当然のことと看做している」のであり、ハッキング自身が「ヘーゲル主義的教義の一つ」と見なすプラグマティズムの教義を継承しているのである。この点において、ローティとハッキングは明らかにデューイの共通の弟子であり、それゆえにこそ、20 世紀の実証主義者とは異なり、ヘーゲル哲学に対する敬意を曖昧な表現ながらも明確に共有している。これが新科学哲学の境位である。

そしてハッキングはラカトシュとともに「ヘーゲル的かつマルクス主義的伝統」への一定の理解と評価を共有しながら、ハッキング自身の「介入」概念に基づく科学的新実在論の立場を、以下のように位置づけているのであった。—「科学的反実在論に対する私の攻撃はマルクスの、当時の観念論に対する猛攻撃と類似している。両方とも要は世界を理解することではなく、変えることだと言う」¹³—。ここには理論と実践という古くて新しい実践哲学の問題が、20 世紀科学哲学の成果に立脚した新しい地平において再論されているのであるが、ここに従来の実践哲学の伝統における「実践」概念から科学哲学の成果としての新しい「介入」概念への理論的転換が提示されているのである。

かつての哲学者は日本の大学紛争の時代において、マルクスを模倣した学生活動家から「重要なのは、世界を理解することではなく、世界を変革することである」と迫られたときに、「世界をどう理解するかによってどう変革すべきかが変わるのだから、まず理解しなければ変革のしようがない」と反論したという。しかし今日においては、こうした議論の往復の前提となっている理解と変革との分離、理論と実践との二元論的分離というハーバーマスの前提そのものが現実に出遅れていることの証左となり、時代遅れの徴候ないし症候となっている。そして世界が変わる

とき、それは世界に対峙したり世界を生きたりしている人間そのものが「新しい人間」に変わっているのである。ポランニーの表現でいえば、「これから私たちが自分の経験を解釈するときに用いるであろう準拠枠を変更すること」であり、それは、「自分自身を改変すること」なのであり、「自分の知的アイデンティティの改変」なのである。それは世界の変革をめざすマルクスの理論的実践でいえば、歴史変革の主体としての階級の形成という意味での「私たち自身を変更すること」であり、「アイデンティティの改変」という主体性論の問題へつながることになる。

4. ハッキングとジジエクとの間の符合—科学哲学と精神分析—

ところで、先に「過去を記述し直すとき、我々はみな、新しい人間になる」とハッキングが書き記すとき、それは「意識は記憶の痕跡の代わりに発生する」¹⁴というフロイトの命題(それはフロイトの局所論および自我論と深く結びついている命題である)のすぐ傍にある。というのは、フロイトが言うように記憶の痕跡の代わりに人間の意識が発生するのだとすれば、記憶の痕跡が書きかえられるとき、つまり過去が記述し直されると、人間の意識が新しく発生することになり、つまり新しい意識が発生し「新しい人間になる」からである。ここにハッキングの科学哲学とフロイト理論との接点を見出すことも可能になるのであるが、こうした「ヘーゲル的かつマルクス主義的伝統」との親和性をもつハッキングの科学哲学とフロイト理論との接点を体現するのが、ジジエクの理論的実践であり理論的介入である。

パリ・フロイト派を創始したラカンによれば、「症候」という概念を考え出したのはマルクスだという。このラカンのテーゼをとりあげたジジエクは、マルクスとフロイトの解釈技法、つまり商品の分析と夢の分析とは根本的に同じだと考える¹⁵。

このようにしてハッキングとの親近性が示唆されたジジエクは、まさにハッキングのいう言語ゲーム論的とも言える「ルーピング・イフェクト」が成立する知の構造を、パリ・フロイト派のラカンの精神分析理論によって、なぜその「ルーピング・イフェクト」が成立するのかという謎を含めて解明するという理論的位置を占めている。とはいえジジエクの著書がハッキングの「ルーピング・イフェクト」を直接に取り上げているわけではない。明らかに英米語圏の分析哲学や科学哲学の潮流の中にあるハッキングが提示している「ルーピング・イフェクト」の「社会的構成」と、ラカン派のジジエクが提示する「ループ(loop)」¹⁶状の「遡及的効果(retroactive effect)」¹⁷の「遡及的構成」¹⁸とが、またハッキングの「記憶を書きかえる」がジジエクの「過去を書きかえる」¹⁹とが、同様の構造を示していることに注意が向けられたことは、これまであまりない。しかしこうしたハッキングとジジエクとの間の符合が決して偶然的符合ではないということは、ハッキングを取り上げることのないジジエクが、現代分析哲学の大家とされるマイケル・ダメットの『真理(truth)という謎』のなかの「結果はその原因に先立ち得るか」と「過去を変える」という二つの論文を、取り上げているところに示唆されている²⁰。

ではフロイトに始まる精神分析理論が、ジジエクにおいてハッキングのルーピング・イフェクト論に対応するようになるのはどのようにしてであるか、そしてさらにルーピング・イフェクトが成立する謎をどのようにジジエクは理論的に説明するのか、を見てみよう。

5. 偶然的症候への言語的象徴による意味付与

『イデオロギーの崇高な対象』第2章を始めるにあたってジジエクは、B.ラッセルを師としたサイバネティクスの創始者で「時系列の予測理論」等の業績を残したノーバート・ウィーナーの時間の逆行というメタファーを取り上げたラカンの著作を引用している。

—「ウィーナーは、それぞれの時間的次元がたがいに逆向きに進行しているような、二人の人物を仮定する。たしかにこのことにはなんの意味もないが、こんなふうにして、なんの意味もなかったものが突如として何かを意味するようになる—ただし、まったく異なる領域において。どちらか一方が他方に向けてあるメッセージ—たとえば四角形—を送ったとすると、逆方向に向かっている人物には、四角形が見える前にまず四角形が消えるところが見えるだろう。われわれもまたそれと同じものを見ているのだ。症候ははじめわれわれの前に一つの痕跡としてあらわれる。その痕跡はあくまで痕跡のままでありつづけ、〈分析〉がかなり先まで進み、われわれがその意味を実現してしまったときにはじめて理解されるのである(Lacan, 1988, p.159)」²¹—。

このようにラカンを引用したジジエクは、「だから〈分析〉とは象徴化(symbolization)であり、意味のない想像的な(imaginary)痕跡の象徴的統合(symbolic integration)である」といい、「〈分析〉が真実を生み出す」²²ともいう。ここで〈分析〉とは、もちろん〈精神分析〉の省略形である。

では、精神分析が「意味のない想像的な痕跡の象徴的統合」という意味での「象徴化」である、とはどういうことであろうか？その直後でジジエクは「症候(symptom)」を「意味のない痕跡」としているのだ。たとえばヒステリーや多重人格の「症候」に見られる下肢の筋肉の硬直(下肢外転筋の拘縮)は、まだ象徴的意味を与えられていないものである²³。このことを考え合わせると、「象徴化」作業であるとされた精神分析は、象徴(つまり言語)上の意味をもつに至っていない症候(つまり「意味のない想像的な痕跡」)を、言語を基本構造とする象徴界と統合することによって、意味を与えるのである。この意味を与える作業を解釈(Deutung)というのであるが、さらに「意味のないイメージ上の痕跡」は「症候」だけでなく、たとえば訳の分からない(つまり意味のない)夢もまた「意味のないイメージ上の痕跡」だと考えることができれば、夢も「症候」であることになるだけでなく、「夢の解釈(Traumdeutung)」(フロイトの著書としては『夢判断』と訳されている)は精神分析である、ということになる。もちろん、フロイトの「夢判断(Traumdeutung)」が精神分析であるのは言うまでもない。

たとえば、フロイトとブロイアーの『ヒステリー研究』の冒頭に納められた1893年の論文で、フロイトの精神分析療法の原型となる催眠浄化(カタルシス)法に関係する先駆例が紹介された論文として3例あがっているもののひとつにP.ジャネ『心理自動症』(1889年)が挙げられている。精神分析理論の先駆的な理論をフロイトに先駆けて展開していたと言われるジャネは、その中で既に、下肢外転筋の拘縮をとまなう両下肢の麻痺というような「偶然的症状(accidental symptoms)」は、その外傷の原因との象徴的なネットワークの中であって、「事件をどう考えているかによって症状の形が決まる」と述べていた。先ほどの箇所ではジジエクが「〈分析〉が真実を生み出す」と述べていたが、ここで「真実(truth)」とは、「症候にその象徴的位置と意味をあたえるシニフィアンの枠組み(signifying frame)」のことであり、つまり象徴(言語)的なネットワ

ークのことである。ジャネのいう「偶然的症候」というのは、まずはこの意味を与えるシニフィアンの枠組みによる意味付与を獲得していないという意味で「真実」を獲得していないことを指して「偶然的」と言っているのである。これが「偶然的症候」(ジャネ)が「意味のない想像的な痕跡」(ジジエク)である所以である。

ハッキングの詳細な科学史研究によれば、トラウマ(心的外傷)概念の世界的初出はリボの雑誌『哲学批評』に掲載された1887年のP.ジャネの論文(フランス語圏)であるという²⁴。これに対して、このジャネのトラウマ概念をドイツ語圏に最も早く輸入したのが1892年12月の日付をもつフロイトとブロイアーによる「ヒステリー現象の心的機制について」と思われる。この論文を巻頭に納めたフロイトとブロイアーの『ヒステリー研究』は1894年に出版されたが、この本は、ブロイアーの催眠浄化法からフロイト的な精神分析療法へと彼らの療法が変化していく様子を克明に記録した症例集でもある。その巻頭に納められた「ヒステリー現象の心的機制について」で、つまり精神分析理論の産声とも言える最も初期の黎明期の理論的解明において、催眠浄化法と精神分析療法との境目の段階ながら、次のように書かれていた。

—「われわれの療法は、最初の時に除反応を受けなかった観念(Vorstellung)の作用力を、押しこめられているこの観念の情動に言葉によるはけ口を与えることによって、取りのぞく(aufheben)のである。そしてこの観念を(軽い催眠状態の時に)正常な意識へ引きこむことによって、連想に基づく訂正を受けるようにするか、あるいは医師の暗示によって、健忘(Amnesie)を伴う夢遊の間に起こるのと同じく、その観念を無効にするのである」²⁵—

フロイト等の精神分析療法が「意味のない想像的な痕跡の象徴的統合」という意味での「象徴化」である、とジジエクが後に要約するのとぴったりと対応する理論を、1892年の時点でフロイト等は既に用意していたことになる。この1892年の論文で表象(Vorstellung)というのはラカンやジジエクの「想像」ないし「想像界(imaginary)」にあたる。「最初の時に除反応を受けなかった表象の作用力」と「押しこめられているこの表象の情動」が、ヒステリーの「症候」をもたらす。しかし「押しこめられた」この表象が代理表象する欲望に「言葉によるはけ口を与える」、つまり「想像界の痕跡を象徴界に統合する」(ジジエク)のが「われわれの療法」(フロイト/ブロイアー)つまり精神分析療法の原型なのである。しかし「言葉によるはけ口を与えることによって、取りのぞく(aufheben)」とは言っても、必ずしも除去できるわけではなく、「止揚(aufheben)」されるにすぎないから、1階上の「シニフィアンの枠組み」へと移行するにすぎない。それは、ちょうどヘーゲル『精神現象学』の「自己意識」の章から「精神」の章へと意識の経験の問題が止揚されるのと同様である。だから、ある意味で精神分析には終わりが無いという問題が生じるので、フロイトの最後期には「終わりある分析と終わりなき分析」(1937年)が書かれることになる²⁶。分析治療の終結は、ヘーゲルにあっては「絶対知」の理論的構成の問題であったが、治療家であったフロイトにとっては「去勢の岩(roc de la castration)」の問題となり、ラカンにとっては「パス」という分析家の選定手続きの問題となる。したがってヘーゲルにおける「絶対知」とは、ジジエクの言う「真実(truth)」つまり「症候にその象徴的位置と意味をあたえるシニフィアンの枠組み(signifying frame)」が不断に私たちに意味と症候とを与えているということの自覚の知であるが、ジジエクはこの真実による意味付与には必ず偶然的トラウマが伴っていると言う。ここがハッキングが論じていない領域であるが、この違いを次に見ることにしよう。

6. 「防衛機制」における表象と言語との遭遇—「症候は意味を欠いた痕跡」—

このようにして時間の逆行に関するウィーナーのメタファーをとりあげたラカンを引用したジジエックが、こうしたフロイトの精神分析をこの時間の逆行というメタファーの中で説明しようとするときに、ジジエックのラカン論がハッキングのルーピング・イフェクト論と同様の知的構造を描くことになる。

「症候」が「意味のない痕跡」(ジジエック)であり、つまりまだ象徴界による意味付与を獲得していない「偶然的症候」(P.ジャネ)であるとするれば、その「症候」の意味はどのようにして発見されるのかと言えば、もちろん「言葉によるはけ口を与える」(フロイト)ことによって、つまり言語象徴による「シニフィアン」の枠組みを与えることによってである。たとえばトラウマとなる原光景を見たとする。しかし、たとえばその光景を見た者があまりに幼ければ、つまり既成の象徴的(言語)体系つまり「シニフィアン」の枠組みを十分に習得していなければ、その象徴的「意味」を理解できず、症候は生じない。したがって、その光景に対して「シニフィアン」の枠組みを与えたときに初めて、その光景が「原」光景となり、そのトラウマの「意味を欠いた痕跡」として「症候」が成立するのである。光景は、象徴的意味体系が接近した後という意味で事後的に、「原」光景となるのである。ここにラカンが時間の逆行に関するウィーナーのメタファーを取り上げる必然性がある。また結果が「原」因に先行しうるかという分析哲学者マイケル・ダメットの『真理という謎』の問題提起をジジエックが取り上げる必然性も、この想像界への象徴界の接近というシーンにある²⁷。P.ジャネ『心理自動症』(1889年)は「事件をどう考えているかによって症状の形が決まる」と既に述べていたが、つまり想像界に象徴界が接近する場面で「症候」が成立することを既に示唆していたのであるが、フロイト&ブロイアー『ヒステリー研究』(1895年)は、これを一步進めて心理における「防衛のメカニズム」つまり「防衛本能」とも言われることのある「防衛機制」論を展開する。

—「このことからいわば自然に防衛(Abwehr)という考えが生まれてきた。心理学者が一般に認めているところによると、なにによらず新しい観念〔表象〕を受け入れるのは(信ずるとか、現実を承認するという意味における受け入れ)、自我の中ですでに結びついている諸観念の種類や方向いかによってきまってしまう。そこで心理学者は新たに生じた観念がくぐらねばならない検閲過程のために、特別な専門的名称を作りだしたのである。患者の自我にそれと相容れないことの明らかなある観念が歩みよったのであって、その観念は自我の側から排除の力を呼び覚ましたのであり、この力の目的はその相容れない観念に対する防衛なのである。実際においてこの防衛はうまく成功すると、その当該観念は意識および回想のそとへ駆逐されてしまい、一見してその心理的痕跡がどこにも見当たらないようになる」²⁸—

ここに「防衛機制」とともに「抑圧」のメカニズムが取り上げられていると言えよう。たとえばあるなんでもないありふれた光景の表象(イメージ像)に、人間的意識のありふれた社会化の成長の中で身につけていく言語象徴的な意味体系が近づくとき、つまりいわゆる「物心」がついて「自我」が芽生えるとき、ヒステリー「患者の自我にそれと相容れないことの明らかなある表象が歩みよった」ことになり、そのときに光景は初めて「原光景」となりトラウマの核となる。つ

まりそのときにトラウマとなり、「症候」が成立するのである。だから「症候は意味のない痕跡であり、その意味は、過去の隠された深みから発掘・発見されるのではなく、遡及的に構成される(constructed retroactively)のだ」ということになる²⁹。

こうした倫理的・価値的な意味体系でもある言語的象徴のネットワークとの関係が道徳的トラウマとなる領域については、フランスのP.ジャネはこれ以上あまり理解しなかったし追求しようとしなかった。ここがP.ジャネのトラウマ概念とフロイトのトラウマ概念との微妙な差異である³⁰。そのときになって初めてその光景の「表象は自我の側から排除の力を呼び覚まし」て、つまり「抑圧」されることによって「意識および回想のそとへ駆逐され」て、「健忘(Amnesie)」つまり忘却されてしまい、「一見しただけではその心理的痕跡がどこにも見当たらない」ように見えるが、それはつまり無意識下に「抑圧」されて、「原」光景は意識上は「駆逐されて」忘却されているのに、下肢の麻痺などの身体的「症候」となってあらわれる、それがヒステリーの偶然的「症候」である。こうした意味でジジエクは「症候は意味を欠いた痕跡である」と書くのである。

7. おわりに—1995年のハッキングと1989年のジジエクにおける収斂—

ある特定の言語共同体の象徴体系(それはジジエクの言えれば「真理」ということになる)が意味を付与することによって、ある現象が「創造」(ハッキング『表現と介入』)される。そして「ある方法で分類された人々は、自分たちが分類された通りに変化してゆく傾向にある。しかし同時に、彼らに変化していくにつれて、分類と記述は絶えず改訂されねばならない。多重人格はこのような効果を完璧なまでに説明した実例である」(ハッキング『記憶を書きかえる』)³¹。つまりある象徴体系が意味を付与する中で、ある現象(ハッキングでは「多重人格」という症例現象、フロイトでは「ヒステリー」の「症候」現象)が「創造」され社会的に構成される。こうしたハッキングのルーピング・イフェクトの構造は、ジジエクの精神分析論と同じ構図を確かに示している。だから精神分析的ループにおいては、「意味を欠いた〔身体的〕痕跡」(意味を欠いているからなぜそのような症候が生まれるのか本人には分からないのであり、「抑圧」を手がかりに「意味」を操作することによって症候の原因ないしは原光景を探って治療するのが精神分析療法なのだが)である「症候」は、「シニフィアンのネットワークの変容」にともなって変化し続ける。「歴史的断絶が起き、新しい支配的シニフィアンが出現するたびに、そのことが遡及的にあらゆる伝統の意味を変化させ、過去の物語を構造化し直して、その物語がまったく新しいふうに見えるようにする」³²。だから人間は「つねに『過去を書き換えて』いるのである(we are all the time 'rewriting history')」ということになる³³。

ここで再び、ハッキングの言葉を思い出そう。—「過去を記述し直すとき、我々はみな、新しい人間になる。いわゆる<幼児虐待の社会的構成概念>という話題が、ごく一部の人の関心しか引き寄せないだろうということは承知している。しかし、私は、そのように構成された知識が、ループ(環)となって人々の道徳生活にもどってきて、自分の価値に対する感覚を変え、魂を再構成して再評価する経緯という問題を、常に念頭に置くつもりである」³⁴—。ジジエクとハッキング、精神分析と科学哲学と両者の研究は互いに収斂を見せている。ただしハッキングが『記憶

(Soul)を書きかえる』を出版したのは1995年であり、ジジエクが『イデオロギーの崇高な対象』を出版したのは1989年である。当然のことながら、ジジエクはハッキングを参照しようがないし、ハッキングは参照しようがあるにしてもジジエクに全く言及していない。おそらく互いに無関心なのだと思うが、理論的に全く無関係というわけでもない。それは前にも言ったようにジジエクは、英語圏の分析哲学・科学哲学の潮流にあるハッキングの作業を知らないにしても、今日の分析哲学の大家であるマイケル・ダメットに言及しているからである。—「オックスフォードの哲学者マイケル・ダメットの論文集『真理という謎』の中に、たいへん興味深い論文が二編ある。『結果はその原因に先立ち得るか』と『過去を変える』である。この二つの謎にたいするラカンの答えは『イエス』だ。なぜなら、『抑圧されたものの回帰』である症候はまさにそうした原因(症候の隠された核、その意味)に先行する結果であり、症候に取り組むことによって、われわれはまさに「過去を変えて」いる」³⁵—。

つまりこのようにして、19世紀末においてヘーゲルの「関係」概念をめぐるケンブリッジのラッセルやムーアらとオックスフォードのブラッドリーとの間での論争から始まったとも言える20世紀における分析哲学と科学哲学の席捲は、その今日における最大の代表者ともいえるダメットとハッキングとにおいて、ヘーゲル哲学をフロイト理論に繰り返し組み込もうとしたラカンとジジエクの議論と収斂する様相を呈するに至った。これが20世紀哲学史の始まりと終わりに見られる奇妙な離散と集合ないしは離合集散である。

それは収斂する様相を示しているが、それはまさに「真理という謎」の永劫回帰するループ効果であるかのようにも見える。が同時に、「真理という謎」(ダメット)は「分析命題」(ヘーゲル)として「分析」(フロイト)され、その謎の構造は解明された以上は、その謎は過去に属するはずである。

(註)

¹ 拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」『人文社会学部紀要』第3巻、富山国際大学、2003年。

² 拙稿「ルーピング・イフェクトと現象の創造—偶然性をめぐる心理学史における「ヘーゲルの伝統」—」『子ども育成学部紀要』第4巻、富山国際大学、2013年。

³ ハッキングの介入主義的な科学的実在論およびルーピング・イフェクト論については、前掲拙稿「ルーピング・イフェクトと現象の創造—偶然性をめぐる心理学史における「ヘーゲルの伝統」—」『子ども育成学部紀要』第4巻、富山国際大学、2013年、30頁以降。

⁴ Michael Polányi, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, The University of Chicago Press, Corrected edition, 1962→2002, Routledge, p.112. マイケル・ポラニー『個人的知識』長尾史郎訳、ハーベスト社、1985年、104頁。

⁵ M. Polányi, *Personal Knowledge*, p.105-6. 邦訳、97頁、98頁。傍点は、引用者による。

⁶ G.E.M. アンスコム『インテンション』(1963年)などのポスト後期ウィトゲンシュタイン派の分析哲学の行為論研究の成果に基づいてヘーゲルの実践哲学を再評価したものとして、次を参照。そのピピンの研究においては、道徳生活がアイデンティティの崩壊を経験しながら破局とともに変貌する「人倫」へと展開することの実践哲学上の必然性が最近の分析哲学の成果を援用しながら再評価されている。前掲拙稿でも言及したように今日の介入主義的な科学的実在論の有力な哲学的源流が「ヘーゲルの伝統」である別の所以がそこに示唆されている。—「カントとは反対に、この自己立法的な地位は、ヘーゲルでは、集合的もしくは集団的なものであって、時間経過を通じて継続するが、周期的に襲ってくる根本的な崩壊を免れないとみなされている。それは、規範上の危機が発生し、根本的な価値が参与者への統制力を喪失し始めて、共同の規範における軌道修正が求められる時である」(R. B. Pippin, *Hegel's Practical Philosophy, Rational Agency as Ethical Life*, Cambridge University Press, 2008,

- p.121. R. B. ピピン『ヘーゲルの実践哲学—人倫としての理性的行為者性—』星野勉監訳、法政大学出版局、2013年、210頁)。
- ⁷ Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press, 1995, p.68, ハッキング『記憶を書きかえる』北沢格訳、早川書房、1998年、84頁以降。
- ⁸ 村上陽一郎『日本近代科学の歩み』三省堂、1977年。金成根「科学」という日本語語彙の朝鮮への伝来、『思想』No.1046、岩波書店、2011年第6号、137頁以降。
- ⁹ I. Hacking, *Representing and Intervening, Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge University Press, 1983, p.61-2, ハッキング『表現と介入—ボルヘスの幻想と新パソコン主義—』渡辺博訳、産業図書、1986年、99-100頁。
- ¹⁰ Richard Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton: Princeton University Press, 1979, p.149. リチャード・ローティ『哲学と自然の鏡』野家啓一監訳、産業図書、1993、156頁。伊藤邦武『ケインズの哲学』岩波書店、1999年。
- ¹¹ Hacking, *Representing and Intervening*, p.63, 邦訳、103頁。傍点は引用者による。
- ¹² Hacking, *Representing and Intervening*, pp.112ff., 邦訳、183頁以降。
- ¹³ Hacking, *Representing and Intervening*, p.274, 邦訳、448頁以降。
- ¹⁴ S.フロイト「快感原則の彼岸」『自我論集』ちくま学芸文庫、筑摩書房、1996年、143頁。同「マジック・メモについてのノート」『自我論集』、307頁。
- ¹⁵ Slavoj Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, Verso, 1989, p.11. ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出書房新社、2000年、21頁。
- ¹⁶ Slavoj Žižek, *Tarrying with the Negative, Kant, Hegel, and the Critique of Ideology*, Duke University Press, 1993, p.171, p.209, S.ジジェク『否定的なもののもとへの滞留』酒井隆史、田崎英明訳、太田出版、1998年、266頁、328頁。特に「倒錯のループ(The Perverse Loop)」については、Žižek, *Tarrying with the Negative*, p.193-199, 邦訳、301頁以降。「外へ向かってから再帰する欲動の運動によって形成されるループ」については、Žižek, *Tarrying with the Negative*, p.199, 邦訳、310頁。
- ¹⁷ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, Verso, 1989, p.95, p.175. S.ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出書房新社、2000年、149頁、266頁。
- ¹⁸ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56, p.144, 邦訳、88頁、224頁。
- ¹⁹ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56, 邦訳、90頁。
- ²⁰ Ibid.
- ²¹ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.55, 邦訳、88頁。
- ²² Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56, 邦訳、88頁。
- ²³ チャップリンが脚本・監督・音楽・主演等を兼務した『ライムライト』の物語は、このく下肢外転筋の拘縮>が主人公のバレリーナに偶然的症候として生じたことから始まって、それがチャップリン演じるもう一人の主人公である老道化師が言語によって精神分析を行うことによって治療しつつ、物語の最後においてその老道化師が「対象 a」(ラカン)となることによって、「精神分析は愛である」というフロイトとラカンのテーゼを完結させることで終わっている。この物語の展開からその脚本の書き手がフロイトの精神分析理論を完全に消化して、この物語を創作したことが読み取られる。
- ²⁴ 前掲拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」『人文社会学部紀要』第3巻、富山国際大学、2003年、16頁。
- ²⁵ S. Freud, *Studien über Hysterie / Frühe Schriften zur Neurosenlehre, Werke aus den Jahren 1892-1899*, Gesammelte Werke, I, S. Fischer Verlag, 1991. フロイト/ブロイアー『ヒステリー研究』「ヒステリー現象の心的機制について」1892年12月、懸田克躬・小此木啓吾訳、『フロイト著作集』第7巻、人文書院、1974年、22頁。
- ²⁶ S. Freud, *Die endliche und die unendliche Analyse. 1937*, Gesammelte Werke, XVI, S. Fischer Verlag, 1993, 59-99.
- ²⁷ この結果は原因に先立ちうるか、という現代分析哲学のダメットによる問題提起を、ヘーゲルの『大論理学』は別の視点から「因果命題は分析命題である」という一見理解しがたいテーゼによって提起していた。現代における「症候は意味を欠いた痕跡である」とかルーピング・イフェクトをめぐる問題に先行する古典的な論理的命題は、このヘーゲルの一見理解しがたいテーゼである。
- ²⁸ S. Freud, *Studien über Hysterie*. 「ヒステリーの心理療法」『ヒステリー研究』『フロイト著作集』第7巻、192頁。
- ²⁹ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56, 邦訳、88頁。チャップリンが脚本・監督・音楽・主演等を兼務した『ライムライト』は、「フロイト」理論を劇中で名指しながらフロイト理論に忠実にこの事後的「遡及的構成」を描き出した。
- ³⁰ I.ハッキングによると、P.ジャネはS.フロイトが性の問題を強調したことを酷評したものの、両者の違いは性とは直接には関係ないという。「ジャネのトラウマは個人の行動とは無関係なものだったため、特に記憶の機能という点に関しては、解釈を考え直す必要性が生じることはなかった。これに対し、フロイトのトラウマは人間の行為を伴うものだったために、記憶について再解釈がなされることがあった」(I. Hacking, *Rewriting the Soul*,

p.68, ハッキング『記憶を書きかえる』238頁)。

ハッキングは「人間の行為を記述し直す可能性」(ibid.)を論じるが、ヘーゲルはむしろ「人間の行為を記述し直す」歴史的必然性を問題にしたことに、本稿脚注(6)のR.ピピン『ヘーゲルの実践哲学』(2008年)は注目している。

また、ハッキング(I. Hacking, *The Taming of Chance*, Cambridge University Press, 1990, ハッキング『偶然を飼いならす—統計学と第二次科学革命—』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、1999年)の科学史研究によれば、フランスのケトレ主義に代表される統計的決定論の観念に対して、パリ・コムューンの最中のライプチヒ大学のG.F.クナップの講義が批判していたように、ドイツ語圏では意志や自由に関わるドイツ的な決定論の伝統が多少は生き残っていたようである。

なおフランスにおいてこうした統計的決定論と道徳との問題について理解を示したのは、もちろんエミール・デュルケームであり、だからこそバタイユはデュルケームに注目したし、アドルノ『否定の弁証法』は概念の社会的構成に関してデュルケームを高く評価する。

なお、概念の社会的構成へのヘーゲルによる研究の着手についても、実は既にアドルノ『否定の弁証法』が指摘していたことについては、前掲拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」『人文社会学部紀要』第3巻、富山国際大学、2003年、26頁。

³¹ I. Hacking, *Rewriting the Soul*, p.21, ハッキング『記憶を書きかえる』29頁以降。

³² Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56. S.ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』、88頁。

³³ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56. S.ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』、90頁。

³⁴ I. Hacking, *Rewriting the Soul*, p.68, ハッキング『記憶を書きかえる』、84頁以降。

³⁵ Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, p.56, 邦訳、90頁。